

# 国際交流

平成9年9月30日創刊

平成27年9月30日発行(第36号)

二松学舎大学国際交流センター

〒102-8336東京都千代田区三番町6-16

Tel:03-3261-5751

## ◆目次◆

平成27年度春 Semester 交流会実施報告	1
派遣留学修了報告	
文学部4年 熊田 遥 (成均館大学校派遣)	2
文学部4年 佐藤 由佳 (成均館大学校派遣)	2
平成27年度夏期オーストラリア語学研修実施報告	
文学部2年 伊藤 航一	3
交換留学生留学修了報告	
北京大学 銭 栖榕	4
中国文化大学 許 尹馨	4
中国文化大学 江 昱瑩	5

## 交換留学生留学修了報告

浙江工商大学 張 万挙	5
浙江工商大学 張 天恩	6
浙江工商大学 梁 佳麗	6
浙江工商大学 程 妮楠	6
浙江工商大学 熊 琤	7
平成26年度海外協定校教職員相互訪問制度に基づく教職員の来訪	7
平成27年度秋 Semester 派遣留学生紹介	8
平成27年度秋 Semester 交換留学生紹介	8
国際交流センターからのお知らせ	8

## 平成27年度 春 Semester 交流会実施報告

二松学舎大学では、国際交流や日本の歴史・文化・自然に触れることを目的に、留学生参加の交流会を行っております。本年度の留学生交流会は、5月23日(土)に開催され、交換留学生を含む21名の留学生と、9名の国際交流サポーター(国際交流に興味がある学生ボランティア)、引率教職員が参加しました。

午前中は、東京ドームボーリングセンターで留学生と日本人サポーターとの混合チームでボーリングを楽しみ、午後は東京ドームのレストランで昼食懇親会を行いました。

留学生の中にはボーリングは初めてという学生も多く、まずは引率の先生や日本人サポーターからボーリング場の使い方やボーリングのルールを教わり、日本人サポーターとの混合チームに分かれ、2ゲームを楽しみました。

最初は見様見真似で投げていた留学生も、自分のスコアが上がってくるとお互いに拍手やハイタッチをしながら大いに盛り上がりました。2ゲーム目を終えたときには、「もっとやりたい」、「また友達と来ます!」など、楽しい時間の終わりを惜しむ声が聞かれました。

午後の懇親会では、ボーリングですっかり打ち解けた学生同士、美味しいジュッフェを食べながら歓談し、お互いの連絡先を交換していました。会の終わり頃には、ボーリングのスコアの発表と、表彰式が行われ上位入賞者には景品が送られました。

学生たちは、閉会後もなかなか席を立たず、交流会は大盛況のうちに終わりました。



## 派遣留学修了報告



### 韓国・成均館大学校

文学部 中国文学科4年 熊田 遥

「遥は私の日本人の概念を変えた初めての日本人だよ」

私の帰国が迫ったある日言われたとても感動した言葉だ。こんなちっぽけな私が少しでも日本や日本のイ

メージを変えることができたのかと思いき嬉しく涙を流した一言だった。

2014年3月から2015年2月までの約12か月間、韓国の成均館大学校に交換留学生として派遣された。あまり実感のないまま日本を飛び立ってしまい、正直韓国に到着してもこれから1年間も日本に帰れないということをあまり自覚していなかった。最初は毎日慣れない寮での共同生活や学校が思いのほか忙しく、ストレスを感じることも少なくなかった。4月頃になると語学堂で出来た様々な国の友達とあちこち出かけ回り、段々と韓国語での意思疎通も可能になり、韓国で生活しながら韓国文化にも適応していった。

夏休みには語学堂には通わず、韓国内旅行にもあちこち出掛けて回ったことは正解だったと思う。世界遺産を見に行ったり、農作業をさせてもらいに行ったりと、学校では学ぶことのできないものを沢山吸収できたように思う。夏休みに休んだお蔭でその次の9月10日に語学堂と学部授業との目の回るような忙しい毎日を送ることになったのは言うまでもないが、その分やり遂げなければならないという強い意志を持って取り組めたという感じがした。2学期の学部授業の専攻科目では日本人は二松学舎大学の学生しかおらず、同じ授業を受講している韓国の学生たちとはなかなか交流を持てず、そのため助けを求められる人がいなかったことは非常に厳しく、精神的にも参るようなことも多々あったが、交換留学生だからと配慮してくださる教授もいたことは心強く励みになった。国語国文学科の専攻授業は全般的に難解なものが多く理解に苦しんだが、その分どうにか食いついて行こうと必死に授業を受講した。

しかし留学生活約1年間を振り返ってみると、辛い記憶



語学堂のクラスメイトと（筆者：後列左から3番目）

よりも楽しく笑っている記憶のほうが遥かに多いのは確かだ。習慣や文化の差に直面し衝撃を受けたり落ち込んだりすることが無かったわけではないが、それよりも韓国という国の文化や人々について理解を深められたことは勿論、様々な国の友達が出来たことは、これからの私にとって代え難い財産となった。そして外国で生活することで自分を知っているのは自分だけであり、そこで自分自身が何者であるかということを確認する機会であると同時に両親への感謝と自立の精神も芽生えた。また外国で生活するという事は、日本人としてその国では一種の日本の代表であるということ海外に出て初めて感じた。大袈裟に言う自分と自分がどんな言動をするかによって日本や日本人の印象を現地の人や他の外国人に与えるということである。その自分自身の言動に責任を持たなければならないということであり、同時に自分が日本についてあまりにも知らない事が多すぎるといことも痛感させられた。留学中自分の無知さに何度も愕然とした。留学に行かなければ知り得なかった事を多く学び、改めて留学に行くことが出来たことを幸せに思う。皆が皆留学に行くことが出来るわけではない。「チャンスの神様は前髪しかない」というのは本当で、どれだけ優れた人でもチャンスを掴んでそれを活かすことが出来なければ意味がない。これは今後の就職活動や、社会人になってからも言えることである。

また、快く留学に送り出してくれた両親や大学の先生方、支えてくれた友達、その他のすべての人たちに感謝の言葉を伝えてこの留学報告をまとめたいと思う。



### 韓国・成均館大学校

文学部 中国文学科4年 佐藤 由佳

約10カ月の留学期間でしたが、計り知れないほど多くの財産を得られました。私はかねてから20代のうちに外国で生活するというひとつの夢があり、今回の派遣留学でその目標を達成できました。留学へ快く送ってくれ支えてくれた家族と、二松学舎、成均館の両大学、そして韓国語を始め様々な指導、助言を下された渡邊教授、塩田教授、国際交流センターの石井さんに深く感謝致します。

「留学は母国に帰ってからが本番だ」これは友人のイさんの言葉だ。帰国してから2週間ほどたった今、ようやくこの言葉が現実味を帯びてきたようだ。6ヶ月間は語学堂、4ヶ月間は大学の学部授業を受け、学んだことは非常に多かった。だが、一番の財産は私自身の経験と、出会った友人やお世話になった人々だと切に感じる。留学期間は、20年の人生の中で一番楽しく充実し、得るものが多かった時間であった。語学堂では毎日楽しく学び、友人達と毎日のように出かけた。現地で出会った友人は韓国、中国、台湾、フランス、ベトナム、ロシア…と多国籍だが、言葉が不自由であっても友達になれるのだ、と不思議に、同時に嬉し

く感じたことをまだ鮮明に覚えている。ルームシェアや旅行、登山も現地では出会った友人たちと行った。本当に良い思い出だ。またその反面、学部の授業では辛い局面に立たされたが、それがむしろプラスになった。追い込まれることで、更なる学習の面での進歩があった様に思う。日本にいれば決して味わえなかったであろう楽しさ、辛さを経て、外国人として暮らすことで、自分自身の中にも、ものの見方においても、新しい変化・発見があった。

留学前、私は本当に悩んでいた。3年次に留学に行けば就職活動に影響が出るのではないかと、もしゼミナールの単位変換が上手くいかなければ留年する可能性もある。不安を抱えながら出発し、滞在中も金銭面での悩みはずっとあった。だが、帰ってきた今、結果的には多くの心配事が良いほうに転んだのではないと思う。留学する前の私は、何かをやる前に頭で十分すぎるほど考えてから行動する方であった。しかし、あれ程悩みが尽きなかったが、今考えると周りの助けも借りつつ、自分でその時に必死に踏ん張り努力することで、何とかなることもあるのだと考えるようになった。また、人生において、無駄なことは一つもないのだと、出会い、経験する全てのものが私のためになるのだとも考えるようになった。言葉にすると陳腐だが、全てのものに感謝することを忘れてはならないということも留学を通して学んだことの一つだ。

この10カ月は、言葉では言い表せないことがとても多い。これまで書いてきたこともほんの一部にしか過ぎない。充実していてもあっという間に過ぎて行ってしまった留学だった。得たものは非常に大きい。さあ、この財産をどうやって生かすのかはこれからの私にかかっている。あの時は日本語よりも先に口から出てしまった韓国語だって、今は実力が落ち始めていることを感じる。どうやって維持するか。現地で築いたものをどうやって生かすのか。「留学は帰ってからが本番だ」。この言葉が重くのしかかっている。キラキラした10カ月は終わったのではない。これからが始まりだ。



語学堂の仲間と（筆者：後列中央）

## 平成27年度 夏期オーストラリア語学研修報告

オーストラリア屈指の名門大学であるクイーンズランド大学（ブリスベン市）付属語学教育機関（ICTE-UQ）において、8月8日から8月30日までの3週間、オーストラリア語学研修が行われました。第3回目となる今回の研修には、文学部、国際政治経済学部から計15名の学生が参加しました。



### 文学部 国文学科2年 伊藤 航一

クイーンズランド大学での23日間の語学研修を終え振り返ってみると、多くの人々に支えられながら、普段体験することが出来ない素晴らしい日々を送ることが出来たと思います。高校生の頃から外国に留学する事に憧れていた私にとって、今回の語学研修は絶好の機会でした。短期留学は、実際にホームステイ先の家庭で共同生活をしながら現地の大学に通う為、当初はかなり大変なものを想像していましたが、国際交流センターや引率の先生方の手厚いサポートのおかげで、英語や外国の生活に興味さえあれば、初心者でも安心して行く事が出来ると思いました。

オーストラリアは様々な人種が多く集まる国際的な国で、日本との風習の違いに驚く事もありましたが、とても開放的で充実した時間を過ごす事が出来ました。現地での生活に慣れるまで苦労しましたが、ホストファミリーとの会話や留学先のクイーンズランド大学での授業を重ねる度に、一人でも自由に行動できるまでになりました。

会話の中で英語を通じて様々な人種の人達と分かり合える喜びを感じるとともに、英語でのコミュニケーション力の重要性を実感しました。中でも特に重要だと思った事は、

いかに自分から一步踏み込んで意欲的に話そうとするかということで、ジェスチャーでもなんでもいいので、相手に食らいつきながら自分の意志を相手に伝えることが、日常での会話力の向上はもちろん、自分自身の自信に繋がったと思います。

現地での交流の中で多くの人々と出会い、現地の友達を作る事が出来たのが私にとって貴重な財産となりました。親切に接してくれた人々には感謝の気持ちでいっぱいです。帰国した今は、現地の友人といつの日か再会した時に彼らを驚かせるまでに英語力を伸ばすことが私のこれからの目標です！



友人たちと（筆者：前列中央）

## 交換留学生終了報告



### 1年間の留学感想文

中国・北京大学 銭 栖榕

今回二松学舎大学への1年間の留学で、様々な新しいことを体験できて、本当に良かったと思います。

この1年間、佐藤晋先生、高橋先生、阿曾村先生と塩田先生の授業を受けました。先生たちから専門知識を教えていただいた以外にも、日本に関することを教えて頂き、日本のことを再認識できました。

また、修士論文の完成の為、自分自身でそれに関する資料を探しました。生活面では、国際交流センターの皆さんに色々助けていただき、料理も上手になりました。

日本滞在中、私たち留学生と日本人学生が、いい友達になれて、本当に嬉しいです。一緒に様々な活動に参加して、関西、新潟などへ旅行に行って、素晴らしい思い出を作りました。

この1年間の留学は自分にとってとても有意義な時間となり、一生の大切な宝物です。そして、たくさんの人にお世話になり、大変感謝しています。機会があれば、絶対にまた日本に来ます。



### 踏み出す勇気

台湾・中国文化大学 許 尹馨

交換留学生として日本に来た1年間はあっという間に過ぎていった。最初の頃は日本語がうまく話せなくて不安だったが、先生や友達などの

おかげで、勉強も生活も楽しむことができた。また、多くの日本文化を体験することも出来た。

留学生のみんなと日本人サポーターと一緒に山梨県へのバスツアーとボーリング大会に参加したことは、とても楽しい思い出になった。

スピーチコンテストの緊張感は今も心に残っていて、まるで昨日の出来事のように覚えている。異文化の背景を持つ人達と付き合うことで、たくさんの知識が身に付いて視野も広がる。自分でも日本に来る前より成長したと感じている。

留学はすごく勇気が必要なことだが、一步を踏み出す勇気が大切だと思う。最初の一步を踏み出せば、次の一步が踏み出せる。もしその一步を踏み出していなかったら、今の生活は全て夢となっていただろう。留学は楽しむばかりではなかったが、私にとって全てが貴重な経験だったと思う。



白川郷にて



新潟にて、先生と友人と共に（筆者：右）



## 日本のおかげで学習したこと

台湾・中国文化大学 江 昱瑩

1年間というのはあっという間に過ぎるものだと思います。この1年間で私の生活は大きく変化しました。

まず、日本に来てから初めて一人暮らしを始めたことです。一人で暮らしたことがなかったので、交換留学する前はとても心配していました。しかし、実際に来てからは、不思議とすぐに慣れました。

さらに、台湾にいた時の私は、学校とアルバイトの時間以外はあまり外に出たくなかったのですが、日本に来てからは色々な都道府県に旅行しました。ガイドブックに載っている様々な所に行って、たまにホームステイもさせていただき、とても貴重な経験ができました。

日本と台湾の違いを観察し、日本の方々と交流することを通じて、今まで知らなかった台湾の良さも知ることになったので、日本にとっても感謝しています。何度も思ったことですが、念願の交換留学に來られて本当に良かったです。もし機会があればまた日本に來たいと思います。



キツネ村にてーキツネとの触れ合い



## 日本に来て良かった

中国・浙江工商大学 張 万拳

日本での留學生活が終わり、今、中国に戻って來たが、日本でいろいろ経験したことはまだはっきりと覚えている。

異国他郷という日本の社会と風習を感じ、母国より優れているところを学ぶことを目標に日本に來た。当初は日本人との交流には不安を感じたが、日本人は静かな民族で、日本人と一緒に居る時は、沈黙しても大丈夫なので、少し安心した。勿論例外もある。それは授業中だ。授業中は自分の意見を述べなければならない。それも次第に慣れ、先生や他の学生達といふ雰囲気でも議論したり、互いに教えたりし、大変勉強になった。新しい知識を学び、見たこともない資料を見て、自分の研究をすることは人生で最高の事だ。今は、もう一度日本に行き、勉強し続けたいという夢を持っている。

「今、日本と中国のGDPは、ほぼ同じなのに日本の総人口は一億であり、中国の総人口は十三億以上である。だから、日本人は中国人より十倍努力しないと行けない。」と二松学舎大学のある人が言っていた。日本人は本当に真面目で勤勉な民族だと思い、感動した。

夜、家に帰るとき、よく学校から靖国神社の中を通り、九段下駅に行った。靖国神社を歩きながら、今まで長い間、争い論じられるこの神社は中日の人々に歴史の教訓を汲み、人の命を大切に、互いに平和のために努力するべきであることを伝えたがっていると感じた。

周りの先生方と友達のおかげで、良い思い出作りができた私は、日本に來て本当に良かったと思い、優しい先生方に何とお礼を申し上げてよいのか、感謝の言葉もない。これから私も再び日本に行くためにもっともっと頑張るつもりだ。



弥彦山で友人たちと（筆者：右）



## 時間よ、ちょっと待ってくれ

中国・浙江工商大学 張 天恩

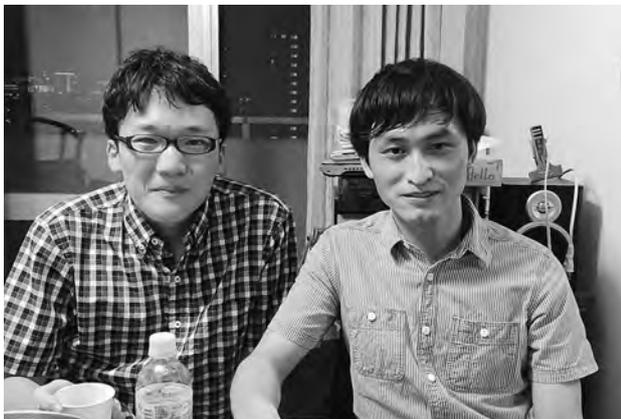
梅雨が長引いて、連日雨が降り続いています。来週末、本番の夏に入るそうです。時間のたつことの速さを嘆きながら、いよいよ、七月に入りました。

今朝、雨の中、いつもどおり家を出て、金町駅に向かいます。雨の中、東京のこの小さな町といい、この小さな駅といい、清々しく見えます。思わず、別れる前の言い知れぬ悲しみにとらわれました。

この小さな駅を経由して電車で日本のどこにでも行けるようですが、めったに遠くには行きませんでした。この小さな町を安住の地として、なんだか旅に発つのを嫌がっていたのに、ほとんど毎日駅に行って、電車に乗ってどこかに行きました。

九段下駅を出て、九段坂を登ったら、学校がそこにあります。梅雨の時期、道端の桜の木や銀杏が雨に洗われて、美しさが一層目立っています。「時間よ、ちょっと待ってくれ」と叫びたいです。時間は止まることがないから、大切です。しばらくして、全てが過去になって、思い出になります。

この一年間、二松学舎大学で感動を味わいながら、楽しく過ごしました。色々お世話になりましたが、心より感謝の意を表したいです。



先生の研究会にて（筆者：右）



## 留学感想文

中国・浙江工商大学 梁 佳麗

日本に来たときの時のことは、まるで昨日の出来事のように覚えています。あっという間に帰国の準備に追われる時期になってしまいました。部屋に置いてある大型のスーツ

ケースを見ると、いっそう別れの寂しさを感じます。この一年を振り返ると、悲しいこともありましたが、楽しいこともいっぱいありました。日本の文化を満喫しました。この一年間は、私にとって、大切な宝物です。

この一年間、東京だけでなく、新潟の雪国、鎌倉の海、京都の桜、山梨の富士山なども見ました。前に見た日本ドラマ、アニメ、映画のシーンが目の前に現れたのがすごく不思議です。日本の食べ物で、一番好きなのはラーメンです。シンプルなのに、味には深さがあります。

長い間、二松学舎大学の皆さんには、いろいろとお世話になりました。感謝の気持ちは言い切れませんが、誠にありがとうございます。



雪国で雪遊び（筆者：左から2番目）

## 留学の感想文

中国・浙江工商大学 程 妮楠

留学生活はいよいよ最終章に向かっていく。この一年間は、初めてのことばかり経験していたような気がする。初めての一人暮らし、初めての花見、初めて家族がそばにいない正月。初めて…初めて本や写真やテレビで見た日本を、自分の目で確かめていた。



初めてのことは必ずしもいいことではないけれど、その喜びも悲しみも全部大切な思い出になってくれた。ここにあるすべての出会いは、絶対に忘れられない。

いつも優しくしてくれた皆様、本当にありがとうございます。



留学生交流会で行った山梨にて



## 短い半年 貴重な思い出

中国・浙江工商大学 熊 瑋

4月に日本に来た時のことは、まるで昨日の出来事のように覚えています。あっという間に帰国の準備に追われる時期になりました。

この半年を振り返ってみると、素晴らしく有意義な時間となりました。最初の頃は、食生活や環境に慣れず体調を崩しました。また、夜中に地震で目を覚まし、不安

で帰国したいと思ったこともありましたが、そんな時はいつも優しい友人と先生方が助けてくれました。

留学生として毎日勉強をするほか、人との交流もとても大事だと思い、積極的に心を開いて交流してきました。お世話になったことも本当に多かったです。おいしい食事をご馳走してくれたおばあさん、果物をサービスしてくれたおじいさん、いつもお土産をくれた先輩達、カバンを落とした時、一緒に探してくれた人達…数え切れないほど助けられました。また、先生から多くのご指導をいただき、とても勉強になりました。感謝の気持ちで一杯です。

この留学を通じ、生の日本を自分の目で見ることで私は本当に幸運だと思います。お世話になった皆さまにいつか恩返しができるように、今後も精進いたします。そして、今度日本に来る時は桜だけではなく、紅葉も雪も満喫したいと思います。



松本先生前期最後の授業で（筆者：前列左から2番目）

## 平成26年度 海外協定校教職員相互訪問制度に基づく教職員の来訪

平成27年2月9日～2月14日の日程で、北京大学歴史学系より、管曉寧先生が本学を訪問された。本学と北京大学歴史学系との海外協定校職員相互訪問制度は、平成13年度から始まり平成26年度で13回目を迎えた。管先生は北京大学歴史学系で、留学生受入の事務を担当されており、本学からの派遣留学生も毎年大変お世話になっている。恒例の記念講演では、「一学生から見た北京大学生活」と題し、管先生ご自身の母校でもある北京大学の学生生活についてユーモアを交えながら紹介して下さった。講演には北京大学に留学した本学の学生も駆けつけ、講演終了後には留学中にお世話になった管先生を囲み談笑していた。

期間中、管先生の希望で足を伸ばした京都では、清水寺や金閣寺を見学され、短期間ながら日本を満喫し、今回の訪問を終えられた。



理事長室にて表敬訪問  
（左より、武永教授、管先生、水戸理事長）

## 平成 27 年度交換留学制度

交換留学とは、「二松学舎大学交換留学に関する規程」に基づく、海外協定校への1年間または半年間の派遣留学です。本学では、協定校の中国・北京大学、韓国・成均館大学校、台湾・中国文化大学、オーストラリア・シドニー工科大学、中国・浙江工商大学、ハンガリー・エトヴェシュ・ロラーンド大学の6校に留学できます。協定校によって、応募期間や資格、協定校への授業料の支払い等、派遣条件がそれぞれ異なるので、詳細は「海外留学の手引き 2015」をご参照ください。

### 派遣留学生紹介

◆中国 北京大学

文学部 中国文学科 3年 **破魔 仁美**

◆台湾 中国文化大学

文学部 中国文学科 3年 **玉地 雄太**

### 交換留学生紹介

◆中国 北京大学 (平成27年10月～平成28年9月)



**高 燎**

◆台湾 中国文化大学 (平成27年10月～平成28年9月)



**許 瑞玲**



**曾 運宏**

◆中国 浙江工商大学 (平成27年10月～平成28年3月)



**黄 碧波**



**任 夢青**



**劉 麗蓉**



**喻 星**

## 国際交流センターからのお知らせ

#### 第12回外国人留学生日本語スピーチコンテスト

**日 程** 平27年12月5日 (土)      **場 所** 九段キャンパス1号館 507号室

すっかり恒例行事となりました、本学の外国人留学生による日本語スピーチコンテストを今年度も開催します。留学生たちが日ごろの勉強の成果を披露する貴重な機会です。皆さんの来場をお待ちしております。

#### 国際交流年末懇親会

**日 程** 平27年12月5日 (土)      **場 所** 九段キャンパス地下1階 学生食堂

父母会の助成を受けて国際交流年末懇親会を開催しています。留学生の皆さん、楽しい時間を過ごしながら、新たな1年の抱負について語り合しましょう。

<b>編 集 後 記</b>	<p>◇8月に2名の派遣留学生が中国と台湾にそれぞれ旅立ちました。沢山のことを学んで帰ってくる日を楽しみにしています。</p> <p>◇9月に昨年度から本学に留学していた7名の留学生が留学期間を終え帰国し、10月から新たに7名の交換留学生が本学で学ぶことになりました。短い期間ではありますが、思い出に残る留学生活を送ってほしいと願っています。</p> <p>◇本誌へのご意見・ご感想をお寄せください。</p> <p>E-mail : icenter1@nishogakusha-u.ac.jp</p>
----------------------------	--